平塚の
石仏めぐり
18、公所・根坂間編

宝珠院 地蔵

公所・根坂間の石仏

公所と根坂間は河内とともに中世においては「坂間郷」と唱えられ、それぞれ「中坂間」（根坂間）、「東坂間」（河内）、「西坂間」（公所）と称されていたようですが、天保 12 年 (1841) に完成した『新編相模國風土記稿』によると、根坂間村、小内村、公所村と記されており三村に分離されています。また、同風土記稿の公所村の条に「東南の間より入る一路を鎌倉往縄と唱ふ」とあり、公所から纏を経て南原の諏訪神社前へ続く「鎌倉往縄」と呼ばれていた古道も存在します。県道公所大磯線の交差点に残る「かまくら橋」の名はここが鎌倉道だったことを示す証の一つです。

旭北地区である根坂間、公所という地域は昭和 29 年 (1954) に、旭村が平塚市と合併、また、昭和 45 年 (1070) 以降の住宅開発（山下団地・高村団地・日向岡等）により農村風景から住宅地域へと大きく変貌しました。

公所の石造物は 20 基と少なく、主に大正期以降の造立で比較的新しいものが多いです。江戸期造立はわずかに 3 基のみで、ほとんどが公所神社に集中しています。

根坂間地区の石造物は 59 基で、元禄年間 (1688 ～ 1704) 建立の立派な庚申塔が 2 基あります。また、宝珠院には徳本名号塔を始め市内最古銘の地蔵や観音、阿弥陀など、青柳院では、道祖神や馬頭観音、不動明王、廻国塔などそれぞれ見ごたえのある石仏に出会えます。

石仏豆知識 14. 廻国塔について

廻国とは、北は出羽国、陸奥国から南は薩摩国、大隅国まで、また、海を隔てて佐渡や隠岐を含む律令制で定められた国庁の置かれた日本全国六十六ヶ国の寺社（基本的には国分寺や一之宮ですが、必ずしもそうでない）に詣で、大乗妙典（法華経）を納経する巡礼のことです。

今のように交通機関の発達していなかった時代に、速い人で数年、時には十数年をかけて、ほとんどを徒歩で踏破する壮大な巡礼で、相当な覚悟と多大な費用が掛かったものと思われます。そして、大願成就を記念して本人もしくは周囲の人々が、あるいは、道半ばで亡くなられた行者を供養して建てた塔を廻国塔といいます。

廻国塔の造立は、全国的にみると 1700 年代から 1860 年代にかけて集中的に行われており、関東甲信越に多く、北陸、南九州には少ないといわれています。

市内の廻国塔は寺院等に 26 基あり、「大乗妙典六十六部日本廻國」「六十六部供養塔」等と刻まれ、巡礼者を行者、聖、六十六部等と呼んでいます。市内の造立年がわかる廻国塔は 24 基で、23 基は 1711 年から 1810 年に造られ、江戸中期から後期に廻国納経が盛んだったことがわかります。

根坂間の宝珠院にある廻国塔の銘文から、行者のこと、その行程や苦労、住職や村人が行者へ支援したこと等が理解できますのでご紹介します。

現在は万霊塔の一部となっているため、残念ながら銘文は正面しか見られませんが、かつて調べた記録によれば、塔正面に「南無阿弥陀佛」、右面に「奉納六十六部供養」とあり、裏面に同寺住職が根坂間の行者高橋氏の道中の様子を詳細に銘記しています。行者は享保 18 年 (1733) に根坂間を出発し、「坂東八箇国」を経て、東北、北陸、九州、四国、関西、東海の順に巡り、4 年から 10 年位かかるところを 3 年で全国へ納経したようです。「寒暑」「乞食」「喜怒愛」の文字も読み取れ、寒い時も暑い時も施しを受けながらの托鉢に感謝と喜び、時には堪え難い苦労もあったことが見て取れます。

公所・根坂間の石仏所在地と主な石仏

番号	名　称	住　所	主　な　石　仏
1	左口神社	日向岡 1-12	道祖神、水神
2	根坂間路傍	根坂間 92	馬頭観音・題目塔
3	八坂神社	根坂間 404	観音、庚申塔
4	八剣神社	根坂間 466	手水石
5	根坂間自治会館前	根坂間 651 東	道祖神
6	宝珠院	根坂間 654	徳本名号塔、名号塔・廻国塔、阿弥陀如来、地蔵他多数
7	根坂間路傍	根坂間 688	地蔵
8	子の神神社	根坂間 695	子の神
9	青柳院	根坂間 726	道祖神、馬頭観音、六地蔵、不動明王、観音、地蔵他
10	根坂間路傍	根坂間 848	庚申塔
11	公所屋敷内	公所 103 西	稲荷、金神

番号	名　称	住　所	主　な　石　仏
12	公所神社	公所 145	道祖神、天照皇大神、地神塔、牛頭天王、庚申塔他
13	安楽寺墓地内	公所 157	釈迦如来
14	公所路傍	公所 348	地蔵
15	公所路傍	公所 418	道祖神
16	八剣神社旧跡	公所 454	神名塔

※ 当ガイドマップに記載されている石仏の基数は令和 3 年集計時点のものです。

石仏めぐりを行う場合の心掛け

石仏は、古来より多くの人々がさまざまな願いをこめて手を合わせ祈ってきたものです。今でも信仰の対象とされているものも数多くありますので、見学に当たっては、敬いの心を持って接しましょう。

また、お寺や神社など石仏の管理者がいらっしゃる場合は、石仏を見学する旨一声かけてから見学しましょう。

平塚の石仏めぐり（18. 公所・根坂間編）
発行日：令和 4 年 12 月
編　集：石仏を調べる会
発　行：平塚市博物館
住　所：神奈川県平塚市浅間町 12-41
電　話：0463-33-5111

左口神社の石仏　（地図番号①）

水神（旧：年代不詳、新：平成 8 年）

左口神社は、「オシャマッチャン」と呼ばれ、根坂間の第 4 地区（叶谷）でまつる水神です。石祠が 2 基あり、古い石祠は年代不詳ですが新しい石祠は平成 8 年 (1996) に建てられました。

この池の水（湧水池）は、昭和 50 年頃まで水田の灌漑用水に使用されていて、昔はこの池はもっと広く。日向岡団地の造成時に狭くしました。

毎年 2 月 17 日に近い日曜日に祭りが行われています。

根坂間路傍の馬頭観音題目塔　（地図番号②）

馬頭観音・題目塔
明治 18 年）

この自然石型の塔には、正面に「丸に橘」の紋と、日蓮宗の題目である「南無妙法蓮華経」、そして「馬頭観世音菩薩」が彫られています。裏面に明治 15 年 (1882) から明治 18 年 (1885) までの三つの紀年銘と施主名が彫られていることから、日蓮宗の信者の方が死んだ三頭の馬の供養をするため建立したものと思われます。

馬頭観音が彫られた塔は市内に 170 基、文字だけのものは 106 基あります。

八坂神社の庚申塔　（地図番号③）

庚申塔（元禄 8 年）

社殿右奥に台石から高さ 162cm もある精緻で彫りのすばらしい立派な庚申塔があります。舟型で上部に日月を配し、足下に邪鬼を踏んだ六臂（ろっぴ）の青面金剛像です。

台石の三面には猿を配し、裏面に梵字「ボローン」（一字金輪仏頂（いちじきんりんぶっちょう））が彫られています。正面に「奉造青面金剛尊」、「為二世［安□］也」、右面に「相列大住郡根坂間村 同行十八人」、左面に「元禄八乙亥歳　九月吉日」(1695) の銘文があります。

宝珠院の石仏 (1)　（地図番号⑥）

宝珠院は天台宗のお寺で本尊は三尊弥陀です。

徳本名号塔（昭和 63 年）

徳本名号塔　参道入口に「南無阿弥陀佛　徳本」とある塔は、江戸後期の念仏行者徳本上人の独特な書体を刻む徳本名号塔です。念仏布教のため市内を 3 回訪ね、弟子は千人ともいわれ、直弟子の徳延の称善が旧中郡に大規模な大会念仏を組織し、30 年位前まで念仏が行われていました。

左面に上人の経歴、称善、昭和 63 年 (1988) 再建などが記されています。

宝珠院の石仏 (2)　（地図番号⑥）

万霊塔　本堂裏の万霊塔に聖観音、阿弥陀如来、地蔵、「石仏豆知識 12」で紹介の廻国塔などが積み上げられています。

聖観音菩薩 (昭和 11 年）

聖観音菩薩　本堂裏手の万霊塔頂に聖観音が聳（そび）え立っています。

聖観音基壇の各面（現在は万霊塔の基礎にはめ込まれている）や供養経緯板（消失）及び「根坂間横穴群諸霊供養塔」によれば、昭和 8 年、当院の裏山から十余りの横穴が発見され、横穴の諸霊を供養するために昭和 11 年 (1936)、浅草、両国、根坂間の人達により、横穴に浅草寺観世音の分身として聖観音が建立されました。

境内整備に伴い、現在はこの塔頂部へ昭和 57 年 (1982) に移設安置されています。

阿弥陀如来（寛文 2 年）

阿弥陀如来　万霊塔の聖観音のすぐ下に万霊塔の一部となって、寛文 2 年 (1662) に作られた阿弥陀如来像があります。

如来は右手を上に左手を下にして、ともに人差指と親指で輪を作る来迎印を結び、頭上には梵字で「キリーク」（阿弥陀如来）、「サ」（観音菩薩）、「サク」（勢至菩薩）の阿弥陀三尊が表されています。

阿弥陀如来のおられる極楽で往生できることを願い、寛文元年と寛文 2 年に亡くなられたご夫妻の菩提を弔って造立されたものと銘文から推察できます。

地蔵菩薩（推定寛永 6 年）

地蔵菩薩　万霊塔の裏手やや右側に万霊塔の一部となって、総高 93cmの舟型に彫られた地蔵があります。

右手に長い錫杖を、左手に宝珠を持ち、頭上に地蔵を表す梵字「カ」が刻まれています。

碑正面から「□永六巳天」の紀年銘が判読され、年号の「永六」と干支の「巳」から「寛永六年」（1629）と推定されます。紀年銘の書かれたものとしては市内で最古の地蔵と推定されます。

阿弥陀畑から出土した五輪塔群　万霊塔の左手に沢山の五輪塔が安置されています。

説明碑によると、この五輪塔は昭和 57 年 (1982)、根坂間の通称「弥陀畑（みだばたけ）」から出土したもので、五輪塔 39 基、宝篋印塔 1 基、板碑（中世の板状の供養塔）7 枚などが発見され、その中の板碑に「嘉元三年」（1305）の刻銘が判読されたため、鎌倉後期の武士や豪族の供養塔とみなされています。

五輪塔群（鎌倉時代）

青柳院の石仏　（地図番号⑨）

青柳院は天台宗のお寺で本尊は滝見観音です。滝見観音は相模新西国三十三観音第 24 番札所となっています。

道祖神（左 平成 9 年、右 文政年間）

道祖神　参道入り口左手に新旧の文字道祖神と双体道祖神が並んでいます。

右側の双体像は文政年間（1818 ～ 1830）の造立で、右神は有冠で笏を持ち、左神は有髪で合掌しています が風化が進んでおり、顔面は削られているのが残念です。

左側の文字道祖神には神名の横にひらがなで「おんさげいさめいそはか」という真言が刻まれており、裏面には「平成九丁丑師走」(1997) とあり、最近建てられたものです。

真言の刻まれた道祖神は初めてかもしれません。

廻国塔（宝暦 13 年）

廻国塔　本堂裏手奥に「六十六部供養塔」と記された廻国塔があります。

塔左面には、三界における全ての霊と、全ての親類縁者の子孫繁栄、現世と来世の安楽を願って建てたとの趣旨の銘文が、塔右面には、「願以此功徳・・・」の偈頌（げじゅ）と、宝暦 13 年 (1763) の紀年銘が記されていますが、建立主が廻国をされたのかどうかは銘文からは読み取れません。

根坂間路傍の庚申塔　（地図番号⑩）

根坂間のバス通り脇の小高い畑の上に元禄 3 年 (1690) に建てられた高さ 130cmあまりの笠付型庚申塔があります。

庚申塔（元禄 3 年）

正面に釈迦如来を表す梵字「バク」、その下に「奉供養庚申石塔為二世安楽也」の文字、左側面に金剛界五仏を表す梵字、右側面は大日如来を表す梵字と偈頌（げじゅ）、裏面は建立年と根坂間村、造立者 14 名の名前があります。

三面にそれぞれ一体の猿が、ひざを折り曲げた姿で彫られています。

公所神社の石仏 (1)　（地図番号⑫）

明治 6 年 (1873) 村鎮守の熊野社と八剱神社を併せて祀られた神社で、御祭神は倭建命（やまとたけるのみこと）、伊邪那美命（いざなみのみこと）、速玉之男命（はやたまおのみこと）、予母津事解之男命（よもつことさかのおのみこと）とあります。

左右の単体道祖神（共に年代不詳）
中央の文字道祖神（平成 25 年）

道祖神　階段途中の左手に 3 基の道祖神が並んで建っています。

左右の道祖神は共に造立年不詳で、正面に一体の神像が彫られた単体道祖神です。単体

公所神社の石仏 (2)　（地図番号⑫）

道祖神は、市内東部の神田地区や城島地区に多く見られますが、その他の地区では珍しい存在です。

地神塔（嘉永 2 年）

中央の文字道祖神は平成 25 年 (2013) の造立で、根坂間の青柳院にある道祖神と同じ真言らしき文言が刻まれています。

地神塔　本殿右の石仏群の中に、自然石に「地神社」、台石に「村中」と彫られた嘉永 2 年（1849）造立の地神塔があります。地神は作農の神で、春は豊穣を願い秋は収穫に感謝して村全体で信仰され祀られていたと思われます。

牛頭天王　同じ石仏群の中に、自然石に「牛頭天王」と刻まれた造立年不詳の石塔があります。牛頭天王は、元は疫病神（やくびょうがみ）とされていたが、厚く信仰することで逆に厄災を除いてくれる神様と信じられています。

牛頭天王（年代不詳）

また、傍らには文化 9 年 (1812) に建てられた大きな石祠があり、正面左側には「牛頭天王宮」、右側には「太神宮」と刻まれています。

牛頭天王は素戔嗚尊（すさのおのみこと）と同一視され太神宮の天照大神（あまてらすおおみかみ）とともに祀られているものと思われます。

公所路傍の地蔵　（地図番号⑭）

公所の交差点傍の小道を北に下っていくと、左側の石垣の一角に、両手で水瓶に差した未敷蓮華（みふれんげ）を持つ、腰から上部が彫られた（下半身は不明）地蔵尊が祀られています。

地蔵（年代不詳）

かつては太陽を拝み五穀豊穣を祈念する天道念仏地蔵尊として祀られていたそうですが、昔この付近に湧水池があったことから、現在地元では「お水神さん」と呼ばれて信仰されています。

八剣神社旧跡の神名塔　（地図番号⑯）

新しい祠内に、現在は正面と裏面が逆になって納まっていますが、正面に三本の剣、両側面に各二本の剣、裏面に一本の、計八本の剣が彫られ、裏面に「奉納八劍大明神尊形」と刻まれた寛文 5 年 (1665) 造立の神名塔です。

神名塔（寛文 5 年）

この場所は剣塚と呼ばれ、坂間郷の総鎮守だった八剣明神社の旧地に当たります。『新編相模國風土記稿』には八剣明神の神体石と記されています。